

学校教育目標	社会で通用する基礎・基本を磨き、 よりよい自分、よりよい学校、よりよい社会を目指そうとする生徒の育成		
a ミッション 【地域・社会における本校の使命・存在意義】	地域が誇る学校づくり ～ 地域からの期待に応え、期待を超える学校づくりを ～	a ビジョン 【実現しようとする本校の将来像】	○オール因島南(園・小・中及び家庭、地域)で、連携・協働し、生徒を育む学校 ○学校・地域(ふるさと)を誇りに思い、自分の生き方を見つめ直すことに繋げる学校 ○常にスパイラル・アップを目指し、向上心を持ち、思いを実行に移せる学校

評価計画				自己評価						学校関係者評価			改善計画	
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h	i	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値	達成度	評価		イ	ロ	ハ		
ふるさとを見つめ直し、深く考えることで、自分の生き方を見つめることができる 【育成する資質・能力】 「思考力・表現力」	○「ふるさと因島」を誇りに思い、自分達で、よりよいふるさと、よりよい社会を目指そうとする生徒の育成	◎ふるさと学を中核としたカリキュラムの確立と推進 ■カリキュラムマネジメントの確立(ふるさと学の深化・発展) ■「学びに向かう力」の育成に向けたカリキュラムの改善	「自分の将来に夢や希望、目標をもっている」生徒の割合	85%	67%				・ふるさと学についての共通理解を図るため、古川元校長先生を講師に招いた研修を学期の早い時期に実施したが、認識の差を十分に埋めきることができなかった。そのため、総合的な学習の時間のスタートに学年ごとの差ができることとなった。また、総合的な学習をよりよくするための協議等を行うことも十分できていない。 ・ふるさと学を中核とした教科横断的な視点から捉えた年間カリキュラムをもとに教育課程をスタートしたが、カリキュラムについての教職員の理解が十分でなかったため、カリキュラムそのものの改善に向けての話し合いを仕組むことができていない。				・年間カリキュラムについて、2学期中に、総合的な学習の時間や教科や道徳等のそれぞれの関連や「生き方」を育てる学習がどこで実施されているか等、年間カリキュラムについての共通理解を深めるための教職員研修を仕組むことで、カリキュラムの改善を図る。 ・ふるさと学の深化、発展に向け、総合的な学習の時間の内容を検討する。定期的に各学年の担当者が連携し協議する会を持ち、総合的な学習の時間の評価の在り方に着目した研究を推進する。	
			「自分達の学んだことを人生や社会に生かそうと思う」生徒の割合	80%	81%	90%	B							
「社会で通用する基礎・基本」を身につけ、活かすことができる 【育成する資質・能力】 「はがれ落ちない基礎・基本」	○「主体的に学ぶ」力を育てる授業づくりの推進	◎授業改善の推進 ■「課題発見・解決学習」を取り入れた授業改善の推進(単元開発、「考えさせる」時間の確保) ■校内授業研究の推進、他校視察による研究の推進	「授業の課題について『なぜだろう』『やってみよう』と思う」生徒の割合	90%	70%				・板書における「めあて」、「考えよう」、「まとめ」の各表示を作成し、すべての授業で活用することで、考える場面を増やすように取り組んだ。また、全教員が「考えさせる手立て」を考え、授業でそれをふり返る取組を行った。 ・授業参観月間や校内授業研究を計画していたが、豪雨災害による休校や不十分な計画のため、十分に実施できなかった。また、単元開発の在り方について、明確な方向を示せなかったため、十分な授業改善につなげていない。そうしたことから『なぜだろう』『やってみよう』と感じる生徒が70%にとどまっている。				・一人一単元開発をスタートさせる。広島県実践事例集を参考に本校の単元開発の様式を統一し、その作成を通して生徒が思考力や活用力を伸ばせるような授業改善を進める。いつ、どの単元を誰が開発するかを明確にし、一人一単元開発を進めるとともに、公開授業の指導案検討や授業の模擬授業の実施、授業参観月間の充実を図ることで授業改善を推進していく。 ・教職4年目未満の教職員全員が他校の研究会に1度は参加できるようにすることで若手教員の研修機会を増やす。	
			「『できた』『わかった』と授業で感じている生徒の割合(全教科平均)」	85%	78%					・「授業」「家庭学習」「南中タイム(試験→アゲイン)」「定期試験」をつなぐ『学びのサイクル』の定着と充実に向けた指導をおこなってきたが、家庭学習が不十分な生徒の対策が必要である。 ・昨年度末から取り入れている、火曜日に「南中タイム(試験)」水曜日に「学習サポート」「アゲイン(再試験)」を行う等、部活休業日等を利用する流れが定着してきた。それらが円滑な実施に結びついている。				
			「南中タイムは自分の学習に役立っている」と捉えている生徒の割合	90%	77%						・南中タイムの結果を、1つの表にし、全職員が見ることができるようにした。「定着が不十分な生徒」についての情報を教科担当や学年部の教員が自由に参照することができるので、それぞれの指導に生かすことができるようになった。ただ、こうした改善を通し、課題のある生徒が固定化している実感が一層明らかになった。			
			「『道徳の時間』は自分の成長に役立っている」と捉えている生徒の割合	90%	76%					・毎週「資料吟味シート」を活用し、生徒実態を踏まえた道徳の授業づくりを学年で進めた。 ・道徳について校内研修でロールプレイやウェビングマップなどの手法を実際の映像を見ながら研修した。また、来年度から実施の道徳の評価について資料や映像に基づき研修した。 ・来年度の道徳の教科化に向け、一層充実した研修が必要であるため、研修計画をしっかりとて、研修の充実を図って行く必要がある。				
◎基礎学力の定着に向けた指導の徹底 ■「学びのサイクル」の充実・発展(本時のめあての工夫、家庭学習の充実) ■「南中タイム(週末とめテスト)」の充実及び指導の徹底(アゲイン、サポートの充実)	「『できた』『わかった』と授業で感じている生徒の割合(全教科平均)」	85%	78%				・「授業」「家庭学習」「南中タイム(試験→アゲイン)」「定期試験」をつなぐ『学びのサイクル』をより充実させ、家庭学習の一層の充実を目指す。 ・南中タイム実施により、明確になった課題のある生徒についての取組を強化する。特に、そうした生徒の中で提出物がやりきれない実態に着目し、提出物をやりきらせるための個別の対応や家庭連絡の充実を図る。							
◎道徳教育の充実 ■道徳の時間の授業改善・授業研修(「資料吟味シート」の充実) ■「特別な教科 道徳」教科化への対応の推進(授業方法の工夫、評価の充実)	「『考えた、議論する』道徳は、自分の考えを深めるのに役立つ」と捉えている生徒の割合	90%	76%					・1学期に引き続いて、道徳における様々な手法や板書の在り方に着目した研修を実施する。また、「資料吟味シート」を利用した教材理解の在り方を研究するとともに、積極的に校外の研修会に出向き、学んだことを交流できるようにする。 ・本校の生徒の実態状況を踏まえ、生徒がより道徳的価値を深める日常の取組を検討する。						
自分自身で、また、まわりと力を合わせて、よりよい自分、よりよい学校を創り出そうとする 【育成する資質・能力】 「高い志とチャレンジ精神」	○現状に満足することなく、常に向上心を持って、思いを実行に移そうとする生徒の育成	◎向上心・実行力の育成(「高い志・チャレンジ精神」) ■「プラス・ワン」の実践を通した向上心・実行力の育成 ■「話し合い活動」の充実(安心して意見の出せる風土づくり)	生徒会活動スローガン「プラス・ワン」を実践している生徒の割合	90%	75%					・全生徒の「プラス・ワン」を職員室前に掲示したり、「ステップアップ」で、自分の設定した「プラス・ワン」を教員が、毎日、点検・評価、励ましを行うことで、「プラス・ワン」の意識化を図った。 ・生徒会活動(生徒総会)、学校行事(体育大会)と学級活動(組織作り・SHR)の場面で集団が向上する「話し合い活動」を進めたいが、「人の意見を聞き、自分の意見を発表できる」生徒の割合は55%にすぎなかった。話し合い活動の深まりが十分でなかったためと考えられる。				・話し合い活動を充実させるため、「話し合い活動の形や約束事」についてのモデルを作成する。それらを共有し、全学年で実施することで、話し合い活動を充実させたい。そうすることで、生徒会活動や各行事についての目的意識をしっかりと持たせ、それぞれについて『よりよい』ものを作り上げたいという意欲を高める。 ・個人の「プラス・ワン」がクラスや学校全体の「プラス・ワン」につながるようHRなどで日々の話し合いの場面を持つ取組を実施することで、プラスワンの一層の意識化を図る。
			人の意見を聞き、自分の意見を発表できる生徒の割合	80%	55%				・学級委員会による朝のSHRでの挨拶練習を継続し、体育大会における挨拶・声出しの徹底によって挨拶のレベルアップを図った。しかし、体育大会後、「因南中レベル3のあいさつ」を生徒会のキャンペーン等によって周知徹底することができず、次第に声も小さくなり、一学期末のアンケートでは74%にとどまった。特に1・2年生のアンケートが低くなっており、自信のなさがかげがえる。 ・ロッカーや机の中(教科書・ファイル・プリント等)のモデルを示し、朝のSHRにおける整理・整頓の徹底によって大幅な改善が見られるようになった。また「置き物」についても担任の指導によってほとんど解消された。					
			「積極的に挨拶をしている」と思う生徒の割合	90%	74%						・ロッカーや机の中(教科書・ファイル・プリント等)のモデルを示し、朝のSHRにおける整理・整頓の徹底によって大幅な改善が見られるようになった。また「置き物」についても担任の指導によってほとんど解消された。			
○心を磨く指導による生活改善 ■「挨拶」のレベルアップ(意図的な挨拶向上の計画的実施) ■「場を整える」指導の徹底(委員会・部活動指導による徹底)	「自分の持ち物やロッカー・机の中等を整理・整頓している」と思う生徒の割合	95%	81%				・学級委員会による朝のSHRでの挨拶練習を継続し、体育大会における挨拶・声出しの徹底によって挨拶のレベルアップを図った。しかし、体育大会後、「因南中レベル3のあいさつ」を生徒会のキャンペーン等によって周知徹底することができず、次第に声も小さくなり、一学期末のアンケートでは74%にとどまった。特に1・2年生のアンケートが低くなっており、自信のなさがかげがえる。 ・ロッカーや机の中(教科書・ファイル・プリント等)のモデルを示し、朝のSHRにおける整理・整頓の徹底によって大幅な改善が見られるようになった。また「置き物」についても担任の指導によってほとんど解消された。							
◎不登校未然防止 ■組織的な対応(ケース会議の充実、家庭連携の推進) ■生徒理解の推進(アセスの活用、面談の推進)	中学校生活を要因とする新たな不登校生徒を出さない。(不登校生徒数は、半減を目標)	0人(半減)	0人(7/10)	100%(70%)				・教育相談委員会をSC来校日に定期的に開催し、ケース会議の改善(焦点化や担任の困り感、協議による取組内容の検証、全体報告)を図った。また、朝、登校を促す生徒への家庭連絡・訪問を行い、登校日数が増えた生徒がいる。 ・中学校生活を要因とする新たな不登校生徒はいないが、各生徒・家庭への取組みが登校という結果につながらない生徒もいる。7月末、長期欠席7名：うち不登校3名となった。(昨年度7月末、長期欠席8名：うち不登校3名)						
○生活習慣の改善ときめ細やかな見取りと対応による不登校生徒の減少	◎生徒指導体制の改善 ■「ルールを守る」指導の徹底(全教職員による指導の徹底、家庭連携の充実) ■充実感・達成感の向上(小中連携の推進、生徒主体の活動の充実)	「学校や社会のルールを守っている」と思っている生徒の割合	95%	94%					・生徒指導規程の全体・学年・学級指導や「服装・名札点検表」を活用した全教職員による指導の徹底とルール化(3回で担任指導、4回で学年指導、5回で個別指導)によってかなりの改善が見られた。しかし、2・3年生男子、2年生女子の固定化された生徒や登下校中の服装については指導を強化する必要がある。(男子：ズボンの裾上げ、名札、ベルト 女子：名札、下着の色) ・「みんなで何かに取り組み、やって良かったと感じることがある。」というアンケート結果が84%と例年に比べて低くなっている。体育大会のリーダー(3年生)の指導が不十分であったため、2年生の充実感・達成感に課題が残ったと考えられる。					
○自らを律するとともに、学校生活に充実感を見いだせる生徒の育成	「みんなで何かに取り組み、やって良かったと感じることがある。」生徒の割合	90%	84%				・服装・名札点検表を活用した全教職員による指導の徹底と連携した個別指導によってさらなる改善を図る。また、生徒指導部の登校指導を強化し、登下校の服装指導を徹底する。 ・学習発表会におけるクラス合唱の取り組みや地域貢献活動(地区・部活動)、生徒が主体的に参画する小中合同の教育活動(小中合同音楽コンクールリハーサル、中学生ボランティアによる小学生への学習支援、体力づくり(部活動体験・10分間走・陸上記録会の練習)等)によって充実感・達成感の向上を図る。							

【自己評価 評価】
 A: 100≦(目標達成)
 B: 80≦(ほぼ達成) < 100
 C: 60≦(もう少し) < 80
 D: (できていない) < 60

【外部評価】 イ: 自己評価は適正である。ロ: 自己評価は適正でない。 ハ: わからない。